

山菜の採取地としてのエコトーン

兵庫県旧篠山町と岩手県沢内村の事例からの試論

Wild Edible Plant Gathering Activities Practiced at Ecotones

齋藤暖生

①序論

- ②篠山の場合—二次的エコトーンに展開される山菜採り
- ③沢内の場合—一次的エコトーンと二次的エコトーンの使い分け

④考察

【論文要旨】

エコトーン（生態学的移行帯）は生物多様性の保全、資源管理を論ずるうえで重要視されている。本稿は山菜採りの事例を題材にし、これまで十分に議論されてこなかったエコトーンに展開される人間の生業活動の実例をしめすものである。照葉樹林帯に位置し、周辺のほぼすべての植生が二次植生である兵庫県旧篠山町では、農作業に伴う頻繁な植生搅乱によって生じた二次的エコトーンにおいて採取活動が行われていた。落葉広葉樹林帯に位置し、比較的多く自然植生が残る岩手県沢内村では、氾濫や雪圧などの自然搅乱によって生じた一次的エコトーンと、林業に伴う植生搅乱によって生じた二次的エコトーンを使い分けた採取活動が行われていた。以上の結果に基づいて以下の3点について考察を行った。1) エコトーンの重要性：山菜採りは農山村周辺の自然環境のごく一部にすぎない特定のエコトーンに依拠している。2) 搅乱の重要性とエコトーンの多様性：エコトーンは自然または人間による搅乱によって成立する場所であり、その搅乱の質や頻度によって異なる様々な環境が作り出されている。このことによって人は採取地を選択する余地を得ていると考えられる。3) 山菜文化のゆくえ：エコトーンの成り立ちを見れば、人間活動が関与しているが山菜は人の意思とは無関係に自然に生育するものであり、山菜資源の変化にたいして積極的な行動がとられることがない。このことは山菜文化が自然環境の変化によって移ろいやすい文化であることと、環境多様性が野生生物を利用する地域文化に対して持つ意義を示唆している。